

蜃気楼

幻水 冬の間、流水に閉ざされたオホーツクの海も、3月半ば頃になると流水が視界から消える海明けの季節となる。水平線に消えたはずの流水が再び幻のごとく水平線に浮かぶ『幻水』現象が現われるのもこの時期である。海明けを迎えたばかり水温は冬の名残りで零度を僅かに超えた所で冷たい。季節は進み、オホーツク沿岸にも早春の訪れとともに暖かな空気が流れ込む。冷たい海で冷された空気は密度が大きく、空気レンズとなつて光を下の方へ曲げてしまう。この空気レンズを通して沖に去つた流水が幻のごとく浮かび、流水の蜃気楼、まさに幻の水の世界となる。季節の交代の時期、進む春の季節と名残の冬の季節の接点に蜃気楼が幻を演出していることになる。

富山湾の蜃気楼 蜃気楼といえは富山湾が日本第一に挙げられている。残雪を抱く後立山連峰が屏風のように迫り、振り返れば富山湾に蜃気楼が見えるという舞台廻しも最高で、

魚津側からみた蜃気楼は絶品と言われている。大瀑布、城壁、大名行列、ビル街、航空母艦そして万里の長城と変幻自在に様々な姿となつて現われる蜃気楼は、幻水と同じ原理で起きている。冬の季節、飛騨山脈に降った雪が、春の訪れとともに豊かな雪解け水となつて黒部川や神通川を流れ下る。雪解け水は淡水なので海水より軽く、冷たい薄い層となつて富山湾を広く覆う。この冷たさがオホーツクの凍てつく海と同じ役割を演じて、春から初夏の季節に流れ込む暖かい空気を冷して空気のレンズを造る。ほどよい距離にある対岸の街がこの透明の空気レンズを通して空中楼閣のごとく浮かびあがらせ蜃気楼となる。ここでも冬の名残の季節と進む季節の接点で蜃気楼が演出されている。気象条件が揃う4月下旬から6月上旬が多く見られ、風のなく陽炎が立つような晴れ渡った日中が好条件となる。

人工蜃気楼 この蜃気楼の幻想の世界は条件が揃わなければ見えず仕舞いで、自然は正直なもので観光客の都合どおりには見せてくれない。それでは困るということで、蜃気楼の

街、魚津では『零るさと創成事業』で配られた1億円をもとで、人工の蜃気楼の世界を作りだして観光資源としてしまった。名づけて『ミラージュ・シタタ』。蜃気楼は英語でミラージュ(Mirage)となり、妄想とか空中楼閣、フランス製の有名な戦闘機も同じミラージュだが関係は定かでない。魚津市の埋没林博物館のテーマ館として開かれており、中に蜃気楼人工発生装置を据えて常時公開している。原理は蜃気楼のメカニズムそのもので、大きなガラスケースに屈折率の大きな気体を下の層にいれ、上の層の屈折率の小さな気体と混ざらないようにすればよい。それを通して遠景が蜃気楼となつて見える。縮尺は千分の1で、20メートル離れた所から見学者が見ることができ、実際体験に近い蜃気楼が見える。気体は企業秘密だそうだ。

蜃気楼あれこれ 蜃気楼を広辞苑で引くと、中国の『史記』のなかの『天官書』に海傍蜃気象 桜台」とあり、古くは大蛤 はまぐり(が吐く気によつて空中に桜台などが現われると考えていた。蜃楼、貝楼、空中楼閣とも呼ばれ、福永武彦の小説の題名『海市 かいし』

も蜃気楼の別名である。魚津市の元広報課長であつた蜃気楼研究家の澤崎寛さんによれば、富山湾の蜃気楼の記事は430年ほど前、上杉謙信(当時長尾景虎)が部下と共に見た有様が『構泉達録』に記されている。魚津海上蜃気楼の事。魚津の海上に蛤の城をつくるを見ると言ひ、男女老若集まりて市をなす。これは蛤の氣を吐にこそあれ、中華にも所謂蜃気楼是なり。又、支那登州の海上に春夏の間此氣あり。城郭市墨依稀として人間の往来絡繹たり。土人呼んで海市といふ。又、西域にも相類する事あり、旭出る時紅暉天に映じて樓門・宮闕、官人などの出入りするを見る。之れを乾達婆域という。惣じて乾坤の間陰陽造化のなす所、測り知るべからずといへり。魚津海上の蜃楼、日本には希なる事：」。

他にも極まれだが信州の諏訪湖でも蜃気楼の記事が『吾妻鏡』に見られ、小説『海市』では南伊豆が舞台である。富山湾の蜃気楼は下層に冷たい空気層ができて、遠くの景色が浮き上がって見えるので、浮上蜃気楼または上位蜃気楼という。砂漠や逃げ水の場合は地面付近が熱せられて、密度が薄くなり光は逆に曲げられて、

地面の中に遠くの幻が見える沈下蜃気楼、下位蜃気楼となる。

目を世界に転じると地中海の蜃気楼で有名なのがファタ・モルガナである。イタリア半島とシチリア島に挟まれたメッシナ海峡に時おり複雑な蜃気楼が現われ、対岸に絶壁や家々が聳えたち、城郭となり水中に沈んだりするこれは海中の水晶宮に住む妖精ファタ・モルガナの仕業とされている。筆者もだいたい昔だが南極昭和基地で海水の向こうに氷山の蜃気楼をみた経験がある。テ・ラル状にあるは白い崖のように神秘的に広がり、ある時は白い浮き島のごとく空中に浮かび、逆転層を境に鏡で写したように対称な白い氷山も浮いていた。それも時間とともに姿が変わり300ミリの望遠レンズでやっと写真に撮れたと記憶している。

(気象大学校 村松照男)